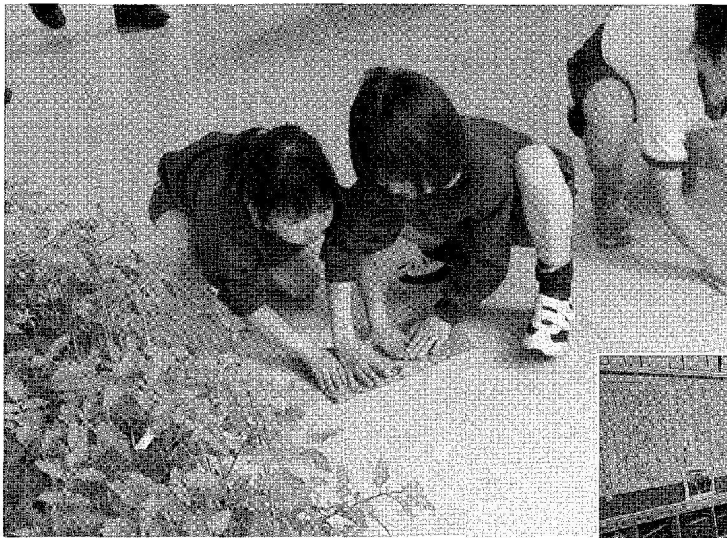


学級活動の研究

臼井 政之



キーワード

他者理解と自己主張 問題状況の自己化 問題点の絞り込み

主張

本研究では、「他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図り、仲間と共に活動を創りあげる子ども」を目指す。

これは、他者の考えを理解した上で、自分の主張と比較・検討し、自他にとって妥当な解決方法を見出していく子どもである。このような子どもは、多様な価値観や考え方もつ仲間と協力し、願いを具現していく中で互いのつながりを深めていく。

バランスのよい合意形成のために着目したのが、「問題状況の自己化」と「問題点の絞り込み」である。これらの働きかけをもとに、互いの考えのよさへの着目や生活体験の振り返りを促すことで、子どもたちは、互いの主張を聴き合い、歩み寄りの道を探していく。

本研究では、生活上の諸問題に対する当事者意識をもち、自己肯定感を高めると共に仲間の考えへの理解を深めながら、仲間と共に活動を創りあげていく子どもの姿を求めた。

I 他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図り、仲間と共に活動を創りあげる学級活動

1. 学級活動で求める子ども

求める子ども

他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図り、
仲間と共に活動を創りあげる子ども

「意欲・態度」

集団生活や仲間との関係を自らよりよいものに高めていこうとする

「中核となる学力」

自分自身や多様な価値観をもつ仲間への見方・考え方

「他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図る」とは、「他者の考えを理解した上で、自分の主張と比較・検討し、自他にとって妥当な解決方法を見出していくこと」である。このような子どもは、多様な価値観や考え方をもつ仲間と協力し、願いを具現していく中でつながりを深めていく。

バランスのよい合意形成には、相手の考えを理解しようとする「共感的な姿勢」と共に、学級の問題状況を自分に引きつけて考える「当事者意識」が必要である。前者が強すぎると、安易な妥協につながり、後者が強すぎると、自分の考えに固執しやすくなる。また、後者が弱いことが原因で、生活の具体から離れた理想論の話合いになる。このような話合いにならないためには、話し合う中身が絞られた上で、互いの考えのよさに着目したり、現実的かどうかを検討したりする必要がある。そこで、本研究では、「問題状況の自己化」と「問題点の絞り込み」に着目した。

「問題状況の自己化」とは、個々の当事者意識を高めることである。問題状況にかかわる共同体験後、個々が自分自身と向き合って考える場を設定したり、問題解決に向けた互いの活躍や努力を賞賛・承認し合う場を設定したりすることで、当事者意識と共に自己肯定感を高めていく。

「問題点の絞り込み」とは、問題状況の最も重要な要因を明らかにすることである。新たに生じた問題の要因を洗い出し最も重要なものに絞り込むことで、論点を明確にし、考えの共通点や違いをはっきりさせていく。

問題状況の自己化と問題点の絞り込みがなされた状況で、「互いの考えのよさへの着目」や「生活体験の振り返り」を促すことで、子どもたちは、自分の考えを見直したり、考えの根拠をはっきりさせたりしてくる。そして、互いの主張を聴き合い、歩み寄りの道を探す中で、他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図っていく。

このような学びを通して、活動に対する見方を更新し、より具体的で妥当な解決方法に再構成することで、仲間と共に活動を創りあげていく子どもの姿を期待した。

2. カリキュラム改善の視点

学級活動で求める「他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図り、仲間と共に活動を創りあげる子ども」を育てるために、仲間の考えと自分の考えとを比較・検討しながらよりよい解決方法を見出していく課題解決力が育まれることを重視する。

(1) カリキュラム改善の視点

学級活動における思考力の育みには、学年に応じた年間の活動（学期ごとに重点化する活動）と年間を通したテーマ設定が重要である。そうすることで、活動と活動とのつながりが意識され、学級の成長に伴った活動内容が設定されていく。この際、活動の対象を学級の中におくのか学級の外におくのかについても、発達段階に応じて設定していく。

(2) カリキュラムの段階性

小学校では、次のような段階で、年間のテーマをもち、学級活動で育てたい資質・能力としての課題解決力を高めていく。

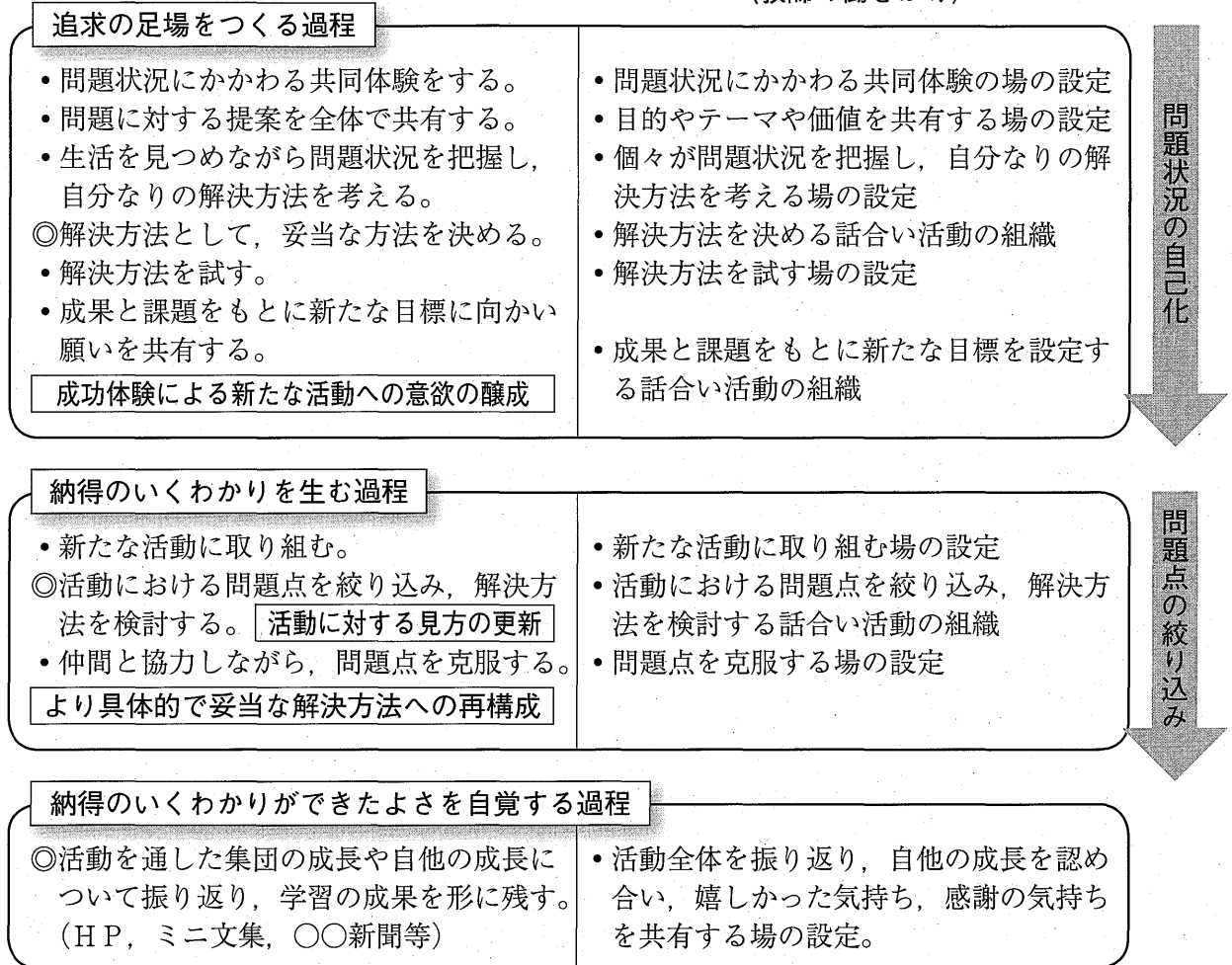
(主として学習指導要領(1)「学級や学校の生活づくり」の内容)

学年	年間のテーマ	学級活動で育てたい課題解決力
1・2年	自分もみんなも活躍できて、嬉しくなる活動をつくろう！	問題状況に気づき、仲間の考えと自分の考えの両方を生かした活動や解決方法を見出す力
3・4年	学級(学年)の自慢や宝物が増え、自分も仲間も成長する活動をつくろう！	問題状況を知り、仲間の考えを自分の考えの中に取り入れたり、自分の考えを仲間に理解してもらえるように説明したりする力
5・6年	一人一人のアイデアを生かし、学校や地域のためになる活動をつくろう！	問題状況を理解し、仲間の考えのよさを自分の考えに積極的に取り入れたり、相手の立場に配慮しながら、自分の考えを主張したりする力

3. 授業改善の方策

〈求める学級活動の学びを具現するための学習過程〉

〈教師の働きかけ〉



4. 評価法

(1) 本活動の場面ごとの様子や記述からの評価

本活動の中での話合い場面での発言、仲間の考えに対する反応、記述に見る考えの変容、活動場面での様子、振り返りの記述等から見取り、評価する。

(2) 本活動が次活動にどう生きているかの評価

本活動で得た考え方のよさを次の活動でどのように生かそうとしているのか、記述と次活動における行動の様子について見取り、評価する。

II 実践の概要

2 学年 めざせ！軽清掃名人～軽清掃パワーアップ作戦にチャレンジしよう～

1. 他者理解と自己主張のバランスで考えながら合意形成を図り、仲間と共に活動を創りあげる学び

自分たちの生活する環境をきれいにすることは、学級としての達成感につながると共に、協力してよりよい生活を築こうとする態度を育てていくことにつながる。しかし、掃除に対して積極的な子どもがいる一方で、「面倒くさい。」「できればやりたくない。」と消極的な子どももいる。そこで、学級全員が清掃状況の改善に向けて、よりよい解決方法を求めて話し合い、自分にとっても相手にとっても妥当な方法を見つけ出していくための手立てが必要になる。具体的には、一人一人が清掃に関する問題状況を自分に引きつけて考えることであり（問題状況の自己化）、問題状況の最も重要な要因を明らかにすることである（問題点の絞り込み）。問題状況の自己化が進むことで、問題の解決方法へのこだわりが生まれる。また、問題点を絞り込むことで、論点が明確になる。問題状況の自己化と問題点の絞り込みがなされた状況で、清掃に対する自分の体験を振り返るよう促すと、子どもたちは、自分の考えの根拠をはっきりさせると共に、共感的な姿勢で話し合い、より現実的で妥当性のある方法へとバランスよく合意形成を図っていく。

他者理解と自己主張のバランスを考えながら、よりよい解決方法を見出していく中で、軽清掃に対する見方を更新し、より具体的で妥当な解決方法に再構成することで、仲間と協力しながら活動を創りあげていく子どもの姿を期待した。

2. 活動の構想

(1) 活動の目標

軽清掃名人を目指すには、効果的に仕事を進める方法を考えていくことが大切であることに気づき、仲間と協力しながら、学級生活の向上に向かって意欲を高めることができる。

(2) 追求の構想（全4時間）

1次 自分たちの軽清掃の問題点と解決方法を明らかにしよう（1時間）

- ①軽清掃の終了時刻が遅くなる原因について、自分なりの解決方法を考え、出し合う。
- ◎5分前行動をして、遊んだり、しゃべったりせずに本気を出して軽清掃に取り組もう。
- ☑決定した解決方法を使って、軽清掃をする。
- ②軽清掃を振り返って、自己評価をもとに活動の成果を出し合い、願いを共有する。

みんなの願い：めざせ！軽清掃がんばりナンバー1の軽清掃名人クラス

2次 軽清掃名人を目指そう（2時間）

- ☑軽清掃名人クラスを目指して取り組む。
- ③軽清掃のここがもっとこうできたらいいのに……と思うことを話し合う。
- ◎1時45分から始めても、軽清掃をきちんと終わらせることのできる方法を考えよう。
- ☑話し合ったことを生かして、軽清掃名人に向かって取り組む。

3次 軽清掃パワーアップ作戦をふりかえろう（1時間）

- ◎活動を振り返って、友だちのすごいなあと思ったところや自分の頑張ったところ、嬉しかった気持ちや感謝の気持ちをまとめよう。
- ④自他の成長や嬉しかった気持ち、感謝の気持ちをまとめ、交流する。

3. 授業の実際

(1) 自分たちの軽清掃の問題点って何だろう？

「先生、軽清掃が遅れたせいで、また5時間目の音楽の時間が短くなったんだよ。」

「ジャンボ昼休みだからって、掃除が始まっているのに、遊びから帰ってこない人がいるよ。」

軽清掃は、自教室を清掃する時間であるが、いつも終了時刻が遅れ、問題が生じていた。

軽清掃が終わった直後の5時間目、亜希子さんが、「軽清掃が遅れるせいで、いつも木曜日の5時間目の音楽が遅れるから、そこを解決したいです。」と提案すると、多くの子どもたちから賛同する声が挙がった。そこで、終了時刻が遅くなる原因について、今までの体験を振り返り、問題点がはっきりしてきた状況で、自分なりに考えた解決方法を出し合う場を設定した。

子どもたちが、自分たちの生活を改善していくことを通して、周りから賞賛されたり自他の考えのよさや活躍を認め合ったりしながら自己肯定感を高め、互いのつながりを強めていく姿を期待したのである。責任感が強く、今の学級にとってどうしていくことが大切かを真剣に考えようとする健二さんは、次のように解決方法を考えた。

5時間目にまにあわせるためには、1時45分まである昼休みを1時40分までにした方がいい。一番大事なのは5分前行動だと思う。

(健二さんの解決方法)

子どもたちは、健二さんの考えた5分前行動の他にも、「おしゃべりをしない」「時計を見て行動する」など、解決方法を出し合った。これらの中で、必ず取り入れたいものについて話し合うと、「5分前行動をして、遊んだり、しゃべったりせずに本気を出して軽清掃に取り組もう」というめあてができあがった。

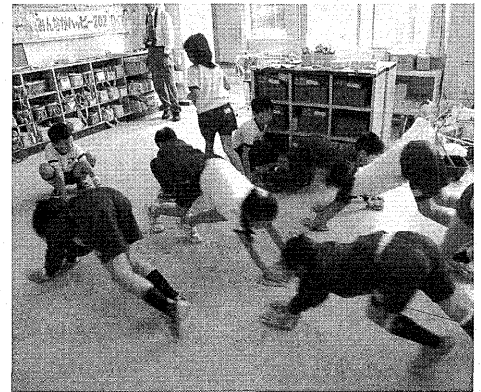
翌朝、2年2組にとって嬉しい出来事があった。全校朝会で副校長先生から、自分たちの軽清掃に対する取組を紹介してもらったのである。このことも手伝って、子どもたちの軽清掃に対する意識が一気に高まり、その日は、クラス一丸となって軽清掃に取り組むことができた。授業開始5分前には掃除を終え、5時間目の音楽の授業にも十分間に合うことができた。担当の先生からも誉められたことで、子どもたちは満面の笑みを浮かべていた。

みんなはしんけんにがんばっていたし、さいこうに楽しかった。声をかけあったり、きょう力してやれたから、「みんなの力でできたじゃん。」と思った。あせをかいだってことは、それだけ、がんばったということだと思う。(亜希子さんの振り返り)

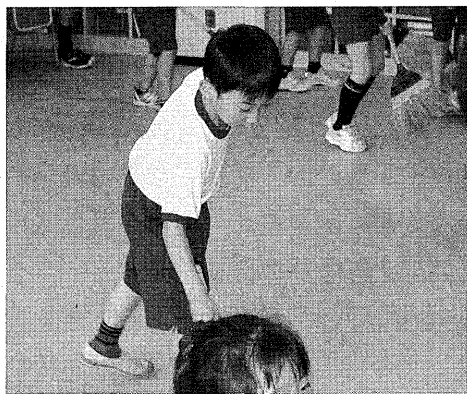
翌日、昨日の軽清掃を振り返る場を設定すると、改善された点がたくさん出された。亜希子さんは、みんなが真剣に掃除に取り組んだことをとても喜んでいて。クラス全員で協力できたこと、そして、それを認められたことで、自己肯定感を高めた子どもたち。今後、軽清掃をどのようにしていきたいかを問うと、「この状態を続けたい。」と答え、次のように願いを共有した。

みんなの願い：軽清掃がんばりナンバー1で、軽清掃名人の202をめざそう

子どもたちが、軽清掃名人のクラスを目指したいと意欲を高め、軽清掃の改善された状態を継続していくための足場をつくることができた姿であると評価する。



(2) どうする？5分前行動



新たな改善策を生み出し、効果的に掃除をすることができてこそ、軽清掃名人である。子どもたちが、清掃の大切さと共に休み時間の大切さにも目を向け、「本当は、ジャンボ昼休みはたっぷり遊びたい。それには、5分前行動をしなくてもすむように、清掃時間をさらに短くする必要がある。どうすればできるのかな。」といった問題意識をもち、軽清掃に対する見方を更新し、より具体的で効果的な解決方法に再構成していく姿を期待した。

そこで、軽清掃に対する自分たちの頑張りを認め合う肯定的な感情を出し合った後で、「ここがこうできたらもっといいのに」という思いを出し合う場を設定した。自己肯定感が高まることで、「休み時間はたっぷり遊びたい」という本音の部分を出し合い、具体的な解決方法を検討する話し合いに進むことができると考えたのである。

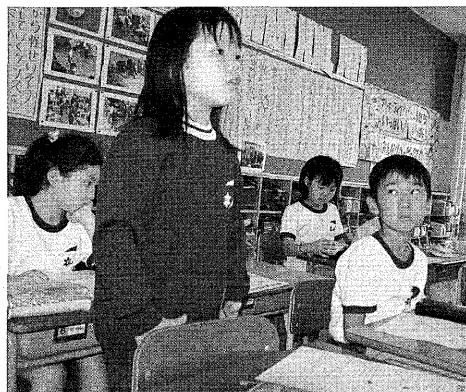
健二さんは、「やっぱり5分前行動をしっかりしないと遅れちゃう場合がある。全員が5分前行動をすることが大事だと思う。」と発言した。その後も、健二さんのように、5分前行動を肯定する意見が続き、期待したジャンボ昼休みに関する意見はなかなか出されなかった。そこで、教師は、「みんな掃除のことを言ってるわけだけど、例えば、ジャンボ昼休みにかかわって、軽清掃がこうなったらいいと思うことはない？」と働きかけた。すると、千香子さんが発言した。

「他のクラスの行動をよく見て、その人たちと同じように、5分前じゃなくてもちゃんとできるようにしたいです。そうしないと、昼休みが5分短くなるからです。」(千香子さん)

5分前行動によって、昼休みが短くなっているという千香子さんの意見についてどう思うか尋ねると、小首をかしげて困った表情を見せる健二さん。千香子さんの発言に納得がいかない様子だった。そんな中、亜希子さんが、「休み時間がちょっとくらい短くなったって、仕方ないと思います。だって、みんなでそう決めたからです。」と千香子さんの意見に反論した。これに対し、周子さんは「しゃべらないで一生懸命やれば、5分前行動をしなくても間に合うかもしれない。」と発言した。周子さんに対して、「それは、できないよ。」と反論する亜希子さん。健二さんと同様、解決方法として有効だった5分前行動を、ここへ来て中止するという考えに対して大きな抵抗を感じていた。そこで、教師は、健二さんと亜希子さんが、「休み時間も大切」という考えのよさに着目することを期待し、次のように促した。

「周子さんの言ったように、5分前から始めずに1時45分から掃除を始めても5時間目に間に合えば、休み時間を長くしたい人も、短くてもいい人も両方満足できるんじゃないかな。」

すると、子どもたちの中から「本気でやればできるよ。」という声が挙がった。これに対して、「本気でやればできるとか、そうかんたんには言っちゃだめだよ。やってみないとわからないよ。」と冷静な表情でつぶやく健二さん。5分前行動によって、5時間目開始に間に合うことができたというはっきりした考えの軸をもち、5分前行動を中止する考えを簡単には受け入れることはできなかった。



一番の長い休み時間を大切に、友だちをつくる時間を大事にした方がいいと思います。それと、時計を見て行動した方がいいと思います。

(健二さんの記述)

そこで、教師は、「さっきの周子さんの考えが、実現できたとしたら、みんなが満足できて、2年2組の学級目標にも近づくことになるんじゃないかな。」と再び働きかけた。すると、「1時45分から始めて、みんなしゃべらないで、ふざけないで、本気を出してやればできるかもしれない。」と発言する健二さん。休み時間の大切さに目を向け始めた。

しかし、5分前行動を続けるかどうかの話合いはなかなか合意に至らず、子どもたち自身の話合いによって問題点を絞り込んでいくことが難しいと感じた。そんな中、利明さんが、「まだ、1時45分から始める方法を試してもいないのに、あきらめない方がいい。どうやったら必ずできるか話し合ってから、試した方がいい。」と発言した。この発言をもとに、1時45分に軽清掃を始める案を試すとして、必ず実現できるようにする方法を検討することを提案した。「たぶん無理だと思うけど、試すだけなら別にいい。」とつぶやく亜希子さん。この言葉を受け、教師は、次のように追求問題を設定し、問題点を絞り込んだ。

◎1時45分から始めても、軽清掃をきちんと終わらせることのできる方法を考えよう。

(3) 軽清掃名人になるために

「45分にきちんと集合することが大切だと思います。」「自分たちの掃除をてきぱきやるのが大事だと思います。」5分前行動をしなくても、軽清掃を時間内に終えることのできる方法について話し合う子どもたち。しかし、具体的な方法のイメージをもつことができずにいた。

そんな中、絵里子さんが、次のように発言した。

「廊下掃除の人は早く終わるから、自分の仕事が終わったら、すぐに教室の机運びを手伝う。」これは、清掃の段取りにかかわる具体的な解決方法である。この考えのよさを教師は価値づけた。すると、「それならうまくいきそう。」と反応する子どもたち。これまでの自分の清掃体験を振り返って、絵里子さんの解決方法のようにうまくいきそうな方法が他にもないか問いかけると、「手伝ってもらったら、ありがとうと声をかけ合う。」「しゃべってしまう人には、やさしく注意する。」といった具体的な方法を出してくるようになった。しかし、これらの方法を試すにしても、この段階で、5分前行動を中止するかどうかについての結論を急ぐのは、どの子も十分に納得しないまま先に進むことになると判断した。そこで、5分前行動を存続しつつ、新たに出された解決方法を試すという折衷案を教師の方から提案した。子どもたちは、この案を受け入れ、一応の合意が図られた。



この後、教育実習期間に入ったが、子どもたちは清掃に対する意欲を失わず、7分で掃除を終えることができるようになった。子どもたちは、さらに清掃時間を短縮しようと意欲を高め、次のような解決方法を生み出した。

- ・黒板も早く終わるから、終わったらすぐに机運びや雑巾がけを手伝えがいい。
- ・みんなが横一列に並んで、一斉に雑巾がけをすれば、同じ所を何度も拭かなくてもいい。
- ・雑巾がけが終わった場所から、すぐに机を運べばいい。

清掃に対する見方の更新に向かう姿であると評価する。

(4) 自信を高めた子どもたち

ある日、給食を完食できるかどうか話題になったとき、子どもたちは、口々に「無理だよ。」とつぶやいた。そこで、軽清掃名人に向けて取り組んできたことを振り返らせると、「そっか、やればできるかもしれない。」と笑顔になる子どもたち。いつも掃除に遅れていた自分たちが、話し合い、協力して、清掃名人に近づいたことに改めて気づき、意欲を高めることができた。

5分前行動をかならずして、あと1分はちぢめたい。ぞうきんの人が一れつにならんで、一度にふいて、つくえもすぐ送ればいい。(亜希子さんの振返り)

さらに早くしたいです。5分前行動をつづけてすみずみまでやりたいと思います。行動、かけ声、いろいろがんばります。(健二さんの振返り)

健二さんも亜希子さんも、新しい解決方法のよさに目を向けてきた。しかし、5分前行動を続けることの価値を主張し、こだわり続け、軽清掃に対する見方の更新には至らなかった。

子どもたちが「清掃と休み時間を両立させるにはどうしたらよいか。」といった問題意識をもち、「みんなで気持ちを1つにして協力することが大切」から「より効果的に行うことが大切」へと軽清掃に対する見方を更新していくためには、休み時間に価値を見出し、清掃時間短縮に向けた問題意識をもつまでの十分な醸成期間が必要であった。それと共に、解決方法の具体例を教師がもっと早く取りあげ、評価する必要があった。また、学級のよさである5分前行動をもっと大切に、5分前行動によって改善された点を評価し、互いに認め合う必要があった。子どもたちの思いを大切にすることによって、それぞれのよさが生かされる形で軽清掃に対する見方の更新が図られたと考える。

Ⅲ 成果と課題

(成果)

承認・賞賛による問題状況の自己化が図られた。

子どもたちが、軽清掃改善に向けて本気になって取り組むことができたのは、問題状況の自己化が図られたからであると考えられる。それは、軽清掃という共同体験が下地にあるだけでなく、追求の足場をつくる過程で、周りの先生方から取組が認められたり、互いに成功体験を賞賛し合ったりしたことによるところが大きい。しかし、子どもたちの問いは一旦解決されるため、満足することだけに終わらないよう、新たな課題へと意欲を高める働きかけが必要である。

(課題)

問題点を絞り込む前に、それまでの解決方法の有効性が認められる場が必要である。

5分前行動にこだわっていた子どもたちは、なかなか削られた休み時間に価値を見出すことができなかった。一番の原因は、問題点を5分前行動に絞り込んだために、この解決策をやめる方向で話し合いが進んでいったことである。子ども達にとって、5分前行動は、大きな意味をもっており、軽清掃改善のためにはなくてはならない方法であった。全員が納得する形で方法論の話し合いに進んでいくには、5分前行動による効果・よさが十分に認められ、掃除が5分以上の余裕をもって終わることができるようにならなければならなかった。つまり、解決方法のよさ、活動のよさが十分に認められ、子どもたちが自己肯定感を高めてきた段階で、活動を一層発展させる上で妨げとなる問題点を絞り込まなければならなかったと考える。

<主な参考文献>

井上裕吉 著 1995 「子どものための楽しい学級活動づくり (低学年編)」 明治図書

平木典子 編著 2008 「アサーション・トレーニング 自分も相手も大切に自己表現」 至文堂